



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

自由学園北京生活学校の教育：
日中戦時下の教育活動

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 孝子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3338

自由学園北京生活学校の教育

—日中戦時下の教育活動—

太田孝子

はじめに

1931年9月、柳条湖の鉄道爆破事件を契機に始まった日中15年戦争は、軍人や政府関連機関・企業従事者はもとより、宗教、教育関係者など多様な分野の人々の大陸進出を促していった。そのうち宗教、教育関係者によって行われた大陸での活動は布教の他、軍事的調査、隣保事業、幼児教育、矯風化運動、日本語教育など多岐にわたる¹⁾。しかし、いずれも政府の方針・意図に賛助すべき「宣撫工作」「文化工作」を期待された活動であったことは疑いえない。1937年11月12日に政府は「1、すべての学校に日本語科を置き日本語を普及し日本化をはかる 2、思想善導のために儒教精神を復興する 3、診療救恤につとめ医療設備を完備する 4、中国文化の研究と発揚につとめ、華北の農産、鉱物資源の開発培養をする」²⁾ という宣撫工作の方針案を発表する。以後、この方針に基づいて行われた大陸での教育活動のほとんどが日本語教育であり、「日本語教師ハ日本語教授ニ際シ単ニ語学トシテ之ヲ取扱フコトナク日本語ヲ通テ日本精神、風俗習慣ヲ体得センメ」³⁾ することを目標として行われたといわれている。

しかし、この時期の教育活動も様々な教育観を背景に持った教師によって担われていたものであり、すべての活動が「同化」をめざして行われていたわけではない。わずかではあるが、教育活動を通して中国の発展を計ろうとした人々のいたことも事実である。

今回、本稿で取り上げる「自由学園北京生活学校」(以下、北京生活学校、生活学校の語も使用)は、1938年5月から1945年の敗戦まで7年半にわたって北京市郊外に実在した学校である。キリスト教的ヒューマニズムを基調として、日中両国民の「相互の理解と親愛の感情の育成」を民間人の立場から行おうとした北京生活学校の教育活動は、この時代における特異な実践として位置づけられる。

自由学園の創設者である羽仁もと子(以下、羽仁と記述)・吉一をはじめ、自由学園卒業生等によって行われた北京生活学校の教育は、中国の貧困層の子女を対象に「1、共に言葉を学ぶ、2、共に生活を学ぶ、3、共に技術を学ぶ」という指標のもと、指導者と起居を共にして合理的な生活方法や日本語、美術工芸を学ぶことによって「生活」の実学を体得させようとした独特の実践であった。専門の指導者による美術工芸の学びは、各地で展覧会を開催して製作品を販売したり、美術家の賞賛を受けるなど大きな成果を上げた。他方、日本語の学びは、日本語や国語を専門とした教師によって系統的に教授されたわけではなく、共同生活の中から生じてくる様々な必要に応じて直接的・实际的に学んでいったものであった。しかし、そのような教授法が逆に功を奏してか、日本語の進歩には目を見張るものがあり、参観者を驚嘆させるほどの上達を見せた。さらに生活学校の活動は校内にとどまらず、近隣の幼児を対象とした「児童生活団(保育園)」および小学生を対象とした「小朋友会」を設立させた他、母親等を対象とした生活講習会、手仕事の指導などの地域活動

にまで発展し、戦後一部の中国人から「戦時下における唯一の文化事業」であったと評されている⁴⁾。

11期にわたる生活学校の卒業生は200余名、うち東京の自由学園へは21名が留学して更なる学びを続けたほか、児童生活団、小朋友会は常時約40名の出席者を数え、小朋友会出身の少年2名も東京に留学して印刷技術の研修を受けている。この間の活動経費は、すべて雑誌『婦人之友』（羽仁もと子主宰、1903年『家庭之友』として発刊、後、これを1908年より刊行されていた『婦人之友』に合本し新規に発行、現在に至る）の読者による一日一銭醸金や「友の会」（『婦人之友』の読者によって組織された会）、自由学園父母からの寄付によってまかなわれた。そのため『婦人之友』には、生活学校の7年半におよぶ活動が指導者や生徒自身によって詳細に報告されている。もちろん、これらの報告の中には「宣撫工作」「文化工作」「日本精神を示す」などの言葉が散見するし、生活学校では、明治節、地球節等の祝賀を挙行し、ことある毎に国旗掲揚、君が代斉唱を行っている。また、東京への留学生は到着と同時に宮城遥拝を恒例とした。この点では、北京生活学校の方針は時代が要請するものから決して離れてはおらず、むしろ忠実だとさえいえる。にもかかわらず、一部の人々から北京生活学校の教育活動が「戦時下における唯一の文化事業」といわれたのはなぜなのだろうか。そこではどんな教育活動が展開されたのであろうか。そして、そもそも羽仁はこの時期になぜ、何を意図して北京に生活学校を創設したのであろうか。

史資料としては現時点で『婦人之友』に掲載された記事および学園関係者による記述がほとんどであり、中国側の資料は皆無という不十分な状況にあるが、本稿では、①関係者以外にはほとんど知られていない北京生活学校の教育の実態を日本語教育の実践も考慮しつつ紹介すること、②生活学校の背後にある羽仁の思想を考察することの二点を中心に、上記の問題意識に答えていくことを目的とする。なお、原文はすべて旧仮名遣いで書かれているが、本稿では新仮名遣いで記述することを予め断っておきたい。

1. 自由学園北京生活学校誕生の背景

1938年5月、北京市地安門外旧鼓楼大街小石橋二号に「自由学園北京生活学校」が開校した。

『婦人之友』創業35年の記念事業として始められた学校である。

しかし、羽仁達の中国への関心はこの時期に始まったものではなく、かなり早い時期から芽生えている。在東京中華民国YMCA総幹事の馬伯援は長女の馬必寧を自由学園に在学させていた関係上（在籍期間は不明だが少なくとも1927年には在学している）、中国からの教育使節団には常に自由学園の参観をすすめたため⁵⁾、羽仁は中国の諸地方から来る多数の教育者と交流する機会に恵まれた。そのため次第に中国の教育に興味を持つようになり⁶⁾、羽仁が卒業前の学生を率いて中国各地の大学を訪れる計画も出ていたが、これは満州事変の勃発により実現しなかった。1934年には、馬伯援との間で留学生の交換が話題になり、山室善子が「家庭友情使節」として中国に送られ、4ヵ月間滞在している。この訪中により、「生活」を基盤とした自由学園独自の教育や友の会の生活合理化運動などは共に国境を越えて妥当する一面を持っていることが確認された。しかし、両国の国交は年ごとに険悪となり、日中戦争という最悪の事態に陥る。だが、羽仁吉一は、中国に関して芽生えた関心は消えることがなく、「この不幸な成り行きに対する責任感も手伝い、1938年春戦火の鎮まるのを待って、北京に学園流の文化事業を起こしたいという願いが燃え上がってきた」と記している⁷⁾。37年12月30日には婦人之友社において「支那の民衆のためにわれら何をなすべきか」

という座談会が開かれ、セツルメント方式で技術を教えること、指導者の育成をはかること、団体生活を教えることなどの必要性が確認されている⁸⁾。

羽仁は同時に、高等科の生徒にも「今我々にできることは何か、どのようにしたらよいかを考えよう」と「燃える火のような訴えを」行った⁹⁾。この年の卒業生（第16回生）は直ちに「支那の民衆のために何をすべきか」を卒業勉強¹⁰⁾のテーマとした。このクラスに尾崎尊堂の紹介で満州からの留学生、遅伯昌がいたことも中国に関心を抱いた要因の一つであった。羽仁と学園生は共に北京生活学校の構想を描き始め、遅から中国語の日常会話を習ったり、蠟山政道など中国に見識の深い人々を訪ねて意見を聞いている。

一方、羽仁五郎は「自由学園も戦争に対して何かしなければならなかったが、この戦争協力には岩波書店あたりも非常に弱って、普通は戦闘機などを献納するところを、赤十字機か何かを献納したのだが、自由学園はもちろん戦闘機などを寄付するわけにはいかないので、かれらのセツルメントを北京につくるということで、『北京生活学校』を開設し」と述べている¹¹⁾。

日中戦争開始後半年で南京が陥落したとき、多くの日本人は事変が日本の勝利に終わることは確実で、これから本格的な大陸経営が始まるものと予想していた。ことに、華北は日本が握るものとみて、文化工作を始めよという意見が強かった。そのような状況の中で、北京に崇貞学園を開いて半生を中国人の教育に捧げてきた清水安三は、中国に進出するなら大陸に骨を埋める覚悟で来る必要があることを強く訴えている¹²⁾。

しかし、なぜ、このような状況下に自由学園が中国に行かなければならなかったのかは、前述の関係者の記述だけでは不十分である。羽仁はなぜこれほどまでに中国に対する責務を感じ、一学校という範囲を越えた行動を起こしたのであろうか。それには羽仁特有の「学校観・教育観」が大きく作用しているといえる。

羽仁は、娘二人の学校教育を体験する中で、既存の学校に失望し文部省令によらない各種学校としての自由学園を創設した。1921年4月、普通科には三女の恵子を入れてほとんどが『婦人之友』読者の家庭から来た26名が、高等科には定員40名に対し60名（長女の説子を含む）が入学した。学園開設に際して羽仁が発表した教育方針は、①生徒が主体的に自己の生活を経営することを学ぶ、②生徒の興味と生活をできるだけ社会に接触させる、の二点に要約できる。この方針に立って「自主独立の人格」を形成するためには、「自労自治的生活」が欠かせないとして、生徒を数名ずつの家族形態に分け、昼食を含むすべての日常生活を雇い人無しに、この「家族」とよばれる小集団で自律的に管理運営していく方式を採った。生徒は学園の用務の一切を担っただけでなく、学園の経済さえ運営していく自治組織を築き上げた。そうした形態による学園の「新社会」生活が、「一般社会」にまで延長されていくことが目的であった。

この羽仁の理念が初めて社会の中で試されたのが1923年9月1日に起こった関東大震災の時である。自由学園と「婦人之友読者組合（後、友の会に発展）」は率先して、衣類と布団作り・廉価販売、自由学園を開放しての「臨時小学校」の開設、救援物資の配給作業、太平小学校への100日間の給食の提供など種々の救援活動に携わる。羽仁は、その活動を通して様々な反応に出会い、自身の教育理念を再吟味していくのである。

反応の第一は、大地震に際してさえ、学生の本分を守るという名目のもとに何もしない学校や、羽仁グループの活動を「学生の本分を忘れているの余計なことだのと陰口したり、無理解な反応をする人」への驚きであった。羽仁はこのような言動は「学校と社会というものを、全く区別してい

る日頃の間違ひから出てきたこと」と捉え、「人の家に大きな出来事が起こったときに、私には私の家の仕事があるの一点張りでしたら、家と家とが孤立して、それが一つの町村にも社会にもなっていない」と批判する¹³⁾。さらに、学生が勉強することをやめてはならないが、「しかし、自分たちの住んでいる大東京が半ば焦土に帰したとき、学生だからといってその難に赴かないことがよいのでしょうか」と疑問を投げかける。「日頃学校生活というものに思いを向けさせ、必要に応じて進出してゆく態度と覚悟を養っておかないならば、私たちの国にどのようなことが起こっても、子ども達の心に本気でそれを考えてみる気も起こらないし、またその心が起こったところで、進んで自分たちの力を献ずる術を知らないことになる」¹⁴⁾ と考えるからである。

震災は、羽仁自身に「社会」を認識させ、その社会との関わりの中で思想を実践させていくときに大きな喜びと成果を与えるものであることを実感させた。羽仁は自身の教育理念に対して自信と確信を深めた。そして以後この信念に基づき、学園生、卒業生を中心に学園近郊南澤でのセツルメント活動、東北地方大凶作時におけるセツルメントの開設¹⁵⁾などの諸活動を展開していくことになる。このような経験があったからこそ、羽仁は社会の動きや時局の意図には特に敏感になり、当時の一大事であった対中国問題の渦中にある中国民衆のために何をすべきなのかという真摯な問いと行動を起こすことになったのであった。

さらに羽仁の行動様式と関連して付け加えれば、羽仁は、1924年1月「東京連合婦人会」の委員長に就任する。貴族婦人から解放された初めての市民的婦人団体といわれる「東京連合婦人会」は、山川菊栄らの社会主義婦人会も含む、ゆるやかな民主統一戦線的性格を持っていたため、当時社会主義でもなければ、反社会主義でもなかった羽仁こそ、その結節点に位置するにふさわしい人物と目されての就任であったと考えられる¹⁶⁾。羽仁は震災時に、上述のような学校のありように疑問を持っただけでなく、「女の無力と無神経をことごとく感じて」、直ちに「社会人としての女」(『羽仁もと子著作集第4巻』所収)を書いた。羽仁は東京連合婦人会の活動を通して「女の目と心と手の行き届いた社会」の実現を切に期待したのであった。しかし、羽仁は会合を重ねる度に、この会のメンバーが既成の、すでに男性がやっているのと同様な会を目指していることに失望していく。連合婦人会は、羽仁が目指す「普通の女の人——出にくい家庭婦人たち、未組織婦人たちが問題を持ちよる場」とはならなかったのである。同会は24年12月に婦人参政権獲得期成同盟会を結成したが、羽仁は同会とは一線を画し、自身の世界へと戻って行く。

自身の世界に戻った羽仁は、婦人をしばっている家庭の仕事を簡素化し、女性を雑用から解放し、生活をすっきりさせなくては何事も始まらないと考え、『婦人之友』読者を組織して、「友の会」を結成する。羽仁は家庭を社会を新しくしていく場と位置づけ、婦人達に、伝統的な受身の在り方から抜け出し、責任を持つ主体的な生き方をするように、意識と生活法の変革を提示していった。「友の会」は羽仁の思想の実践を目標に、各地で「生活合理化運動」を展開していく。以後、「友の会」は、「家庭」という最も平凡な生活の場を新しい価値観によって変革していく運動を担うこととなった。やがてその活動は、社会的活動に動員することが最も困難だといわれる日本の家庭婦人を、自らが自発的に目的に向かって運動を押し進めていく活動に動員し得た数少ない成功例として特記すべきものとなった。しかし、友の会の活動は「生活の合理化」の範囲にとどまり、便利で実用的な生活法を教える運動としてのみ受けとめられたきらいがあり、社会の現実と対峙してその矛盾に立ち向かう運動とはなりえなかった。このような限界を抱えながら、以後、羽仁は自身の理念に基づいた自身の主宰する組織を通してのみ行動していくという方法に固執していくのである。

日中戦争下に展開された生活学校をめぐる問題点については後述するが、ここでは、羽仁の活動には、既述のような経験を通して確立した独特の姿勢——自身の理想とする方式に則り、自身の組織を通してのみ活動していくという姿勢が善かれ悪しかれ影響していることを指摘しておきたい。

2. 北京生活学校の教育目標と実践形態

1938年4月、北京生活学校の創設が『婦人之友』誌上に発表された。前述した中国進出への永年の思いと結びついた課題が、南京陥落の中で実現したのである。表明文では「これまでの日本は、世界の舞台に何を持って働きかけたか。まず戦争でした。次には商売でした。・・・(日本は)ヨーロッパからもアメリカからも、殊に昔は支那の国から、インドの仏教からもいろいろのことを教えられました。日本はそれに比べて何を教えたでしょうか。・・・今我が日本の国に、その機会が来たのです。日本人の実質、その長所を世界の文化と福祉のために、まず立派に直接に役立てることから始めなければなくてはなりません。」とその決意を述べ、続いて安部道雄、山室善子(救世軍山室軍平の娘)、自由学園高等科16回卒業生の川戸俣子(羽仁の信仰の指導者牧師植村正久の孫であり、自由学園の教師でもあった植村環の娘)、同林幹子、同暹伯昌が先発調査隊として3月13日に東京を発ち、すでに大連経由で北京に向かったことを報じている。一行は3月30日には北京で活躍する日本人と会談、生活学校開設の計画を説明し情報を集めた。しかし、中国の情報に詳しい人ほど絶望的な意見を寄せ、同情の立場からも反対意見の方が多かった。しかし、羽仁と一行の考えはすでに生活学校開設という方向で一致していた。先発隊は、もし東北セトルメントでの厳しい実践経験がなかったら、反対を押し切ってまで開校を断行するほど強くはなりえなかっただろうと書いている¹⁷⁾。

北京で発表された生徒募集の要項は以下のとおりである。(本文は中国語)¹⁸⁾

人数—20人、性別—女、年齢—15～18歳、資格—小学校卒業生、期限—3ヵ月(ただしこの期限は1年後に6ヵ月間に、5年後の1943年には1年間に延長された——引用者注)、学費—不要(但し寄宿舍に住むことを条件とする)

北京生活学校は、自由学園によって設立されます。北京生活学校は、日支両国民融合の機関として、次の三項目の下に、両国民が互いに親密なる感情と正しき知識に到達せんことを期します。

1. 共に言葉を学ぶ——相互に深く了解し、親しみを増すためには、言葉を以て意思感情を伝達することが必要です。言葉の教育を三項目の一つとする理由であります。

2. 共に生活を学ぶ——生活学校は人々が、衛生的な且つ合理化された生活に到達することを望むものであります。即ち日々この目的に向かって実践しつつ進んで条理に¹⁹⁾適う整潔なる生活²⁰⁾方式の発見とその完成に努力します。

3. 共に技術を学ぶ——女性に相応しい技術(主として美術工芸)の教育をします。それは自身の産業となし得るのみならず、更に漸次その発展を促し、進んでは土地の産業の一つとして、人々の利福となるようにしたいと思います。

以上のように、北京生活学校では指導者と起居を共にしながら、言葉、生活、技術を学んでいく方式を採用した。これは、東北セトルメントよりさらに徹底した形態であり(ただし土曜日には帰宅している)、これまでに自由学園が行ってきたセトルメント活動・生活合理化運動の国際版とも

いうべきものであった。この募集要項に応じて願書を出した人は82人であったが、審査・面接により20人が第一期生として入学を許可され¹⁹⁾、1938年5月15日、北京生活学校が開学した。生徒のほとんどは貧しい家庭から来た。校舎は北京市長の余晋鮎氏の計らいにより、旧警察訓練所を無償で借りることができた。市長は門番二人と昼夜学校を守る巡警二人を派遣している²⁰⁾。校名を「自由学園北京生活学校」としたこと、軍は開校二、三日前に不許可を通告してきた。羽仁は、教育は教育者と被教育者の間が「自由」でなければ成り立たないとして激しく争い、一時は開校を断念することも考えたほどであった。しかしついに名称に拘泥せずとして開校に踏み切ったのであった。ただし、この校名は羽仁が東京に戻ってから認可されている²¹⁾。

入学式には羽仁も娘の恵子と共に列席し、開学式を司った。指導者は林幹子(16回生)、川戸俊子(16回生)、角館綾子(8回生)、山室光子(救世軍山室軍平の娘で8回生、全期間を通しての責任者である)、今井和子(8回生)の5名である。山室光子、今井和子の両名は当時自由学園工芸研究所に所属しており、欧米での美術工芸展の旅から帰国したばかりであった。第一期には他に北京在住の人々が通訳の労をとり²²⁾、指導者も中国人から中国語を習い対応した。

20人の生徒は5人ずつの「家庭」に分かれ、毎日各家庭から順番に一人ずつ「主婦」が出て一家の生活をリードし、残る家族のメンバーは長女、次女、三女、四女となる。20人を総括した大家族は、一人の大主婦が責任を持つ——これが入学式当日発表された生活学校の組織であり、他は全く白紙の状態で開催された。羽仁の方針としては珍しく「時間割なしの生活」を始めたわけである。「言葉を学ぶ時間、工芸をする時間、食事時間などごく主なところだけを決めて、後は時間がかかってもいいからよく考えさせながらさせる²³⁾」という方針を採ったのである。しかし、話すべきこと、決めるべきことはたくさんあり、毎日一時間「懇談」の時間を設けた。だが、肝心の自由学園の教育を貫く根本理念が通じなかった。通訳がかみ砕いて話しても、自由学園のモットーである「進歩、工夫、努力、協力、希望、真実を語る」などの深い概念は、生徒には容易に理解されなかったのである。雨の日と午後は宿舎でごろ寝していることも初期の問題の一つであった。庭の草も、取っても明日また生えるといっしょに少しも取ろうとはしなかった。所構わず唾を吐く生徒達と「唾についての懇談」も行った。指導者は様々なジレンマを味わいながら、中国の習慣も考慮し、すべてのことを先に立って働いた。そして、この指導者達の姿を見て、生徒も次第に変わっていく。卒業の時、一生徒は「この学校とほかの学校ちがうことを発見しました。ほかの学校は先生達おっしゃることばかりです。生徒も習うことだけです。けれどこの学校は先生と生徒おなじで一緒に仕事します。本当に感心しました。(原文ママ)」²⁴⁾と書いている。北京生活学校の指導者の姿勢また師弟の関係は、中国人にとっては驚きに値するものであったようだ。この種の習慣の違い等によるトラブルは、新入生を迎えるたびに起こっているが、生徒はまた時間の経過とともに見違えるほどの変化を見せた。工芸も、スリッパやテーブルセンター、クッションなどの小さなものから、大きな敷物、タペストリーなど種々の作品を制作し、物を作る喜びに目覚めていった。度々校内や各地で工芸展覧会を催し、外部から多数の来会者を集めている。売り上げも多く、生活学校の諸経費に使われた。製作品の質が高く、大丸百貨店や鐘紡でも即売会が開かれるほどの成果を見せた。

つまるところ、北京生活学校とは次のような学校だったのである。

「日本語と工芸もちろん、お料理、お掃除さえもずいぶん進歩しました。その進歩ばかりでなく、心も強く変わってきました。工芸のほうも私達は先生にたくさんのお話を習ってきました。ステンシルや刺繍や織物やその他、一番むずかしいホームスパンもしました。羊毛洗いから織ることまで、

みんなでずいぶん一生懸命に熱心にして、きれいな物を作ってきました。この学校とよその学校はいろいろのことがほんとうに違っています。生活学校の長所は協力と働きのことです。困ったことがあった時にみんなで考えます。なんの事でも自分でします。たとえばお部屋の壁の上にステンシルしたり、窓のペンキ塗りと塀の壁塗りもしました。(中略) 私達はほんとうにたのしくきれいな部屋を作りました。私達の手はなんでもできます。生活学校の勉強は本を読むばかりでなく、人間の毎日の生活がどうしたらよくなるか、実際に勉強します。(原文ママ)²⁶⁾

北京生活学校での教育は、まぎれもなく自由学園で行われている「生活即教育」という方針を踏襲したものであった。

3. 日本語教育の実態

自由学園には存在しない「日本語」の学習についてはどうだったのだろうか。日本語の学習は全期間を通してすぐ開始された。最初の1ヶ月ほどは中国語を媒介とした授業が行われている。第一期の場合は入学後直ぐ挨拶や羽仁および指導者の名前を覚え、4日目(5月19日)には「ワタクシ タチセイ」「センセイ」「セイカツガッコウ」「ハニモトコセンセイ」「ケイコセンセイ」「ペキン」「コドモノトモ」という書き取りのテストをしている。結果は100点から24点と能力差が大きいので、二クラスに分けて学習することにしたと記されている。5月24日には「日本語は数の数え方、一つ二つ、一月二月、一日二日等。こっちで数をいって黒板に書かしたり、お誕生日の月日を聞いたりしました。明日からはこちらはこの時間は出来るだけ日本語で何でもいうようにしたいと思います。こちらの支那語の覚え方よりどうしても生徒達の方がのろいようです。あんなに日本語を習いたいといったのにもと思いますが、頭の動かし方の練習が出来ていないのでしょうか。」²⁶⁾ という記事が見られる。また、指導者の日報には「台所へ行って、実際について勉強いたしました。名詞を覚えるだけでなく、「切る」とか「玉子がありますか」ということもしました。まな板に野菜をのせて切りつつ、「切る」ということを覚えました。」²⁷⁾「今日は日本語も遠足のために集まったり散ったりする練習にいたしました。」²⁸⁾ など、その時々必要に応じて、極めて直接的・実際的な方法を使った様子が窺われる。

教材は、『子供読本』(『羽仁もと子著作集第12巻』, 子供向けに49の小話がかかれている)を中心に、羽仁からの電報や手紙、『小公子』、『青い鳥』などを用いているが、それらも書かれた意図や内容の集団生活への適用を目的としての使用であり、日本語の学習では上述したように日常生活の中での実践が重んじられたといえる。また、毎週土曜日には日本語の成績をありのままに報告し、皆を励ました。この成績の報告会は中国の常識と違うため、はじめはどのような結果を生むのか憂慮したようだが、報告会のたびに生徒を奮起させることとなり、予想以上の効果を生んだ。

北京生活学校に一ヶ月間滞在し美術を指導した画家の深沢紅子は、「私の部屋に生徒が毎晩一人ずつ遊びに来ることになりました。遊びに来て支那語の全然分からない私と、全く日本語で色々のお話をして一夜過ごすのです。生徒はそれを日本語風呂と名付けました。『先生、今晚のお風呂は私が入ります』と、喜んで来てくれます。支那の少女と私と、一人と一人が向き合って色々なことを話していると私の方がとても沢山のことを教えられました。」²⁹⁾ と、入学後二ヶ月半経った生徒一人一人との日本語を通しての交流の様子を記している。

上述したようなあらゆる機会を用いての日本語教育の実践は、以下に示す羽仁恵子の記述に端的に現れている。

「皆が段々日本語が上手になってきて、何時こんな思いを言えるようになったのかと驚かされるのが度々である。それについても考えることは、生活学校の日本語が教場の日本語であったら、どうであろうかということである。生活学校の日本語は、支那語の華をハナという天上を空というのではなく、生徒達が今まで想像もしなかった新しい生活の言葉のように思える。それだから一日の生活を経れば、それだけ言わんとする事実は増し、それが言葉——日本語となって溢れ出す。

今度は丁度5回生が入ったばかりで、この日本語の勉強を一生懸命した。大分働く言葉、‘持って来る’とか‘洗います’とか‘作ります’などということが言えるようになったので、或る晩、研究生と相談して一夜のうちに学校内のありとあらゆる物に大きな字で日本語の名前を付けた。朝の掃除にバケツを持つとそれに‘バケツ’と書いてある。それを持って水を汲みにゆくとそこには‘水道’と書いてある。お料理をしようとして何か道具を取り上げると、‘包丁’‘鍋’等と面白いように書いてある。研究生は木の枝にまで名前を下げた。

お客様の入っていらっしゃる門にまでその紙が下がった。それまでは助手がいくらか通訳していたが、その日から皆がゆっくり日本語でいて、支那語を少しも使わないことにした。‘お湯を持ってきて下さい’といわれたお料理当番は台所中からお湯と書いてある物を探すことにした。

‘家族合せ’のような楽しみで百五十位の生活学校にある物の名前はすぐ覚えられてしまった。』³⁰⁾

また、見学者の一人は「各人が入学当日から現在まで、百八十日余書かさず記録した日記が陳列してあったが、支那語ばかりで記帳されるのは初めの一週間だけで、二週間目にはオハヨウ、サヨナラなど簡単な日本語が散見し、ついに一ヶ月後にはつたないながら全文が日本語となる」³¹⁾と驚嘆している。

作文もよく書いているが、それらのほとんどは東京の羽仁への報告、手紙という形式をとった。内容も、課題に対する描写に加えて、時間の経過とともに羽仁の教育目標を表す「進歩、工夫、協力」などの語が散見するようになる。次の作文はその一例である。

「協力トハ ドウユウコトカ ワタクシタチハ マヘニハシリマセンデシタ。三カゲツノ セイカツニヨッテ ワタクシタチニ ソノキョウリョクノコトガ ダンダン ワカッテキマシタ。コノマヘノ展覧会ノトキ 大雨ガフリマシタガ ワタクシタチハ ミンナデ イッショウケンメイニ キョウリョクノ タノシサヲ シリマシタ。日本語モ イゼンハムツカシイトオモイマシタ。ココロヲ一ニシ ドリョクシテタガイニテツダイ ダンダンシンボシマシタ。・・・ワタクシタチノウチニ コマッタコトガアルトキハ ワタクシタチハ イッショニドウシタラヨイカラ考ヘテ カイケツシマス。ワタクシタチハ ミンナガ ヒトヲ愛シ協力シテ 一ショニ進歩スルトキハジメテ ホントウノ 親密ト幸福ガ エラレルトオモイマス。(原文ママ)」³²⁾

「進歩する(しない)、相愛し愛励み努力する、心の暗い考えのない人、本気に、うっかりしていると、一段の大進歩、協力の喜び」などの語は、羽仁が最もよく使う言葉であり、自由学園の卒業生である指導者の心にも深く染み込んでいる理念である。その言葉が、生活学校の生徒にも最も強くそして速やかに伝えられているのは興味深いことである。政府は、日本語教育を通して「日本精神、風俗習慣」を体得させることを意図してきた。北京生活学校の生徒も、政府の意図とは異なるものの、指導者の最も強調したこと、伝えたかったことを従順に受けとめていった。羽仁の、そして自由学園の理念を十分に解さない通訳の翻訳ではその内実が伝わらなかったのは無理もないこと

であった。日常の生活を通し、様々の体験を経て自らがこれらの理念を了解し、納得したとき、上記のような自由学園の根本理念を示す一つ一つの言葉が、作文にも日常の会話にも現れるようになったのであった。

羽仁吉一も次のような興味深い発言を残している。

「言葉というものはなかなか面白いものですな。私共の学園に華北の要人殷同氏の娘が二人来ているのです。何しろお父さんが日本語が達者でよく分かるものだから、うちへの手紙はすべて日本語で出していたらいいのです。夫人は日本語が分からないので、今度手紙は支那語で書いてくれるようにと言ってよこしたのだそうです。ところが娘はそれに対して、お母さんにも分かっていたかのように実は支那語で書きたいのだが、他のことはよいが、自由学園のことはどうしても支那語では書き表せなくて困るのだと言ったということです。言葉とその言葉の表す内容、生活の背景というものは切り離すことのできないものだと思います。」³³⁾

外国人が他の国の言葉を確実に習得するということは、その言葉の背後にある思想、文化、習慣等をも習得するということである。殊に北京生活学校のように生活を共にし直接影響を受けるような形態、すなわち日本の中で生活しているような疑似日本的形態で学んだ場合、その効果がより顕著であることを北京生活学校の日本語教育は如実に示している。日本語教育史によると、同時期、中国大陸で用いられていた日本語教授法は、山口喜一郎による「直接法」や大出正篤による「速成法」であり、結果的にそれほど効果が上がらなかったことが指摘されている³⁴⁾。しかし、それらとはまったく関係のないところで独自に生み出した生活を通しての日本語教授法によって、「自由学園の精神」は確実に伝授されていたのである。

なお、全期間を通して生徒の氏名を中国名そのまま呼んでいる点については、羽仁の人権感覚の反映として評価したい。

一期生から日本語、工芸ともに優れた生徒は卒業後も研究生として学校に残り、さらには自由学園への留学の機会が与えられ、留学後再び学校に戻って研究員または助手として勤めるというコースが整えられた。11期にわたる卒業生200余人のうち21名が8カ月余り自由学園へ留学して、さらに日本語と工芸の学びを深めている。東京留学中も生徒の氏名は中国名そのままの発音で呼んでいる。他の卒業生は、43年の時点で、日本総領事館（3人）、市公署（4人）、華北産業科学研究所（5人）、朝鮮銀行（19人）、勸業銀行（2人）、大丸百貨店（10人）、北支開発会社（2人）、近代科学図書館（2人）、その他病院、会社等に就職し、職場では素直で忠実であるという評価を得ている³⁵⁾。いずれも、日本語能力を高く買われての就職であろう。特に、大丸百貨店では、生活学校卒業生のために共同生活のできる特別な宿舎が与えられるなどの便宜が図られている。

卒業生は「同学会」という卒業生会を作り、度々集まりを持った。羽仁をはじめ自由学園関係者が北京を訪れたときには必ず集まって、友好を深めている³⁶⁾。また、卒業生は自発的に「一日一銭醸金」に加わり、生活学校ではその醸金で柱時計などを購入している。一方、指導者は全期間にわたって家庭訪問を実施し、入学式、展覧会、卒業式等には父母兄弟を学校に招待した。それまで北京では教師の家庭訪問や学校への家人の招待という習慣はなかったようで、驚嘆と好感をもって一家総出の対応がなされた。父母からの礼状も届いている³⁷⁾。ここにも東北セツルメントと同種の指導者の献身的な指導が窺える。全期間を通じて32人の自由学園卒業生が直接指導者、協力者として北京生活学校の運営に携わった³⁸⁾。

4. 地域活動への発展

北京生活学校は、学内にとどまらず近隣にも影響を及ぼして行った。子ども達の集まりは、生活学校の置かれた小石橋付近の貧しい子ども達が、学校の門の中に入って遊んでいるのを東京留学から帰った助手が見つけたことから始まった。1939年10月からは時間を決めて集まるようになり、「児童生活団」の開設に発展した。この子どもたちは、壁の崩れ落ちた土塀を連ねた貧しい家の子どもたちで、終日為すこともない親の側について付近をうろつきながら、生活学校の門を出入りする人々を無表情に眺めていた子どもたちであった。子どもたちの親の職業は、巡警2、洋車曳き1、羊肉屋(回教徒)1、無職1、憲兵1、病院雇員1、郵便局員1、骨董屋1、家主1などであり、職業により子どもたちの性質に違いが見られるという報告が残っている³⁹⁾。

指導者は、まず子どもたちに手や顔を洗うことを教え、体操や砂遊び、お絵かきなど日本の保育園で行われているのと同様の光景が見られるようになった。子ども達は、平常、よく買い食いをしたようだが、それを止めさせるためにおやつも始めた。児童の中から毎日「小先生」と呼ばれる当番を出しておやつを配るなどの責任を分担させ、種々の規則を教えている。

『婦人之友』には、40年1月以降、児童生活団の報告が数多く載せられるようになった。43年には、学齢に達した者、あるいは既に学齢を過ぎている者など16人を卒業させて小学校に送ることにし、数人の子ども達には奨学金が与えられた⁴⁰⁾。試験を受けて二年生に編入した児童もいる。日曜日には児童生活団に来られるというので、小学校行きを受け入れた児童もあったようだ。次第に、近隣以外からも児童生活団への入団希望者が増え、42年4月からは常時40名以上を抱える集団となった。東京からは特別に児童生活団担当の指導者が送られ、助手や研究員と協力して指導に当たっている。42年4月の新学期からは児童達の母親の協力を得て昼食も用意されるようになった。昼食作りなど初めは全く思いがけないことで戸惑っていた母親達も、だんだんに興味を持って協力するようになっていった。定期的に健康診断なども実施し、子どもの病気にも注意を払っている。

また、近隣の少年や児童生活団の卒業生によって、「小朋友会」が作られた。この会にも常時40人以上が参加するようになった。生活学校の教師や生徒の働きに触発され、夏休みには毎朝早起きをして、自主的に小石橋の街路をお掃除し、そのあと健康のために冷水摩擦を励行するなど、「生活習慣」の確立を目的とした指導が集団の中に浸透している。また、生徒達は体操の号令や出席人数を数えながら数を覚えたり、一日に二語ずつ日本語を覚える等の日課も果たしており、少なからず「日本化」の影響も受けた。『婦人之友』誌上には、当時、羽仁に送った手紙や絵が転載されているが、その内容は新しい知識や経験を与えられた喜びに満ちたものである。43年2月には小朋友会の中から二名が東京に留学、自由学園男子部実験工場で印刷技術の研修を受けている⁴¹⁾。

さらに、生活学校では、児童生活団、小朋友会に集う子ども達の母親に呼びかけ週一回「母親の会」を開いて相互の連絡と相談の機会としていたが、それが洋裁、料理、家庭工芸などを学ぶ集まりに発展し、次第にその評判を聞きつけた付近の女性達も加わるようになった。生活学校の工芸品の下請け作業も行い、幾分かでも生活を助けることとなった。

上記のような活発な活動により、41年以降は中国人の参観者が目立って増えてきたという記事がしばしば登場する⁴²⁾。卒業生や工芸展覧会、近隣の人々の変化や評判を通して、「北京生活学校は戦時下における唯一の文化事業」だといわれるような状況が、次第に醸し出されていたのであろう。長い間生活学校で働いてきた一助手は、「今、小石橋に住んでいる各家の子どもはほとんど生活学校に来ています。また、大人も学校の忙しい時にいろいろなことを手伝って下さり、前よりずっと

親しくなったことを感じます。一つの学校と周りや隣の人々がこんな協力して親しくなったことは北京中に一処しかないと思ひ、本当に珍しいと思ひます。(原文ママ)」と記している⁴³⁾。上述した生活学校の活動に関わる諸経費の一切は、『婦人之友』読者の一日一銭募金や友の会、自由学園父母などによる寄付でまかなわれたのであった⁴⁴⁾。

羽仁や指導者をはじめとする生活学校関係者は、諸活動の発展を期待し、前途に希望を持って指導と援助を続けた。しかし、敗戦となり、日本人の手によったものは全て重慶政府に接収されることになった。生活学校も接収を免れなかった。そして、45年9月30日が最後の卒業式と決められた。この案内状の印刷は、東京で印刷術を学んできた少年の初仕事であった。多くの参会者を得ての卒業式は、敗戦国による最後の事業とは思えないほどの盛況を見せた。そして、10月23日、接収の係員が生活学校に到着した。近隣の人々は、日頃世話になっている生活学校が接収されるのは気の毒で見ていられないと、戸を閉めてじっとしていたといわれている⁴⁵⁾。しかし、指導者達の覚悟をよそに、接収は非常に穏便に行われた。接収の責任者であった輔仁大学⁴⁶⁾ 教育院長の張懐教授は、生活学校の教育は優れていると評価して、中国の学校として続けることとなった。日本人指導者は一週間以内に退去しなければならなかったが、助手が責任者として学校を続け、財産も現金もそのまま使うことが許された。46年3月には名称を「女子北平生活学校」と改め、輔仁大学教授徐侍峯を校長に、三年制の大学として新たな出発をしている。児童生活団も卒業生により続けられた⁴⁷⁾。

戦後も羽仁のもとには、時折北京生活学校の卒業生からの便りが届いた⁴⁸⁾。1984年春には生活学校の卒業生で自由学園にも留学したことのある劉鳳祥が、卒業生の情報やアルバムなどを携えて45年ぶりに母校を訪れた。さらに88年5月には、北京で「生活学校開校50周年を記念する集い」が開かれ、同年10月には二名の卒業生が来日した。どの卒業生も生活学校の先生を懐かしみ、生活主義教育には心から賛同していることが伝えられている。91年夏には指導主任だった山室光子が中国を訪れ、卒業生との再会を果たしている。その折りに、山室は羽仁と親しくしていた文学者の謝冰心と会っているが、謝の語った「あなたのお国とのただ一つの楽しい記憶でした。あの学校に限り、すべてよい思い出ばかりでした。」⁴⁹⁾ という言葉が印象に残る。これは北京生活学校が戦時下における唯一の文化事業だったということを一面で証明する言葉でもあるように思う。卒業生の中には、当時の指導者達の熱心な姿が忘れられなく、教師になった人もいる⁵⁰⁾。既述してきたような教育環境の中で育った卒業生との交流が現在も続いていることは喜びである。

おわりに—羽仁の歴史認識をめぐって

既述してきたように、北京生活学校の教育は大きな成果を上げ、各方面から高い評価を得た。しかし、その評価は、北京生活学校の教育が「生活」の周辺に関わる内容だったからにほかならない。近年、羽仁もと子の北京における活動を、キリスト教の立場から「戦争協力」だったとして批判する見解がいくつか見られるようになった⁵¹⁾。批判のポイントは羽仁もと子の皇室崇拝の姿勢や天皇制国家体制の内包する根本問題に対する自覚のなさ等を批判するもの、北京生活学校の活動が押しつけの善意であり、侵略者の仕事であったことをどれほど理解していたのかを糾弾するもの、文化的基盤も人々の価値観も全く違う外国であることを意識していたのかを問うものなどであり、一応はうなずける指摘がなされているといえる。羽仁の行動を吟味する時、つまるところ、羽仁の問題点は、①天皇観、②中国人に対する認識、③戦争観の3点に絞ることができる。

第一の天皇観と関連しては、北京生活学校での祝賀式や国旗掲揚、君が代斉唱や留学生による宮

城遥拝については既に指摘したとおりである。他には、北京生活学校への高松宮の視察や賜謁を感激をもって報告したり、生活学校で製作した工芸品を高松宮、秩父宮邸に献上するなど、皇室崇拝が随所に見られる。また、羽仁にはキリスト教の神と天皇を併置した言動もみられる。これは当時のキリスト者の多くにいえることでもあるが、羽仁には天皇制国家体制を問題視するようなキリスト教信仰がなかったからこそ、あの時代的背景の中で北京での活動が続けられたのだといえる。

第二の中国人観については以下のことを指摘しておきたい。奥田は、「日本から行った指導者五人は未開の地に宣教に赴く宣教師のように、貧しく無知な中国の子どもたちを救ってやるのだという使命感に燃えていた。家庭訪問で、スラムに住む生徒の家族の極貧の生活状況を知って、可哀想な子どもたちに何とかして良い生活習慣をつけてやろうとする姿は確かに善意に溢れたヒューマニズムから出たものであろう。しかしその善意が押しつけの善意であること、どんなに民間事業だったと強調しても、中国の民衆から見れば侵略者の仕事に変わりなかったことを、羽仁たちはどれほど理解していただろうか⁵²⁾」と指摘している。確かに指導者の記述には、「支那の救われざる、純真なる少女」「極めて救われざる部類に属している人々」なる語が散見し、指導者の支那観を窺わせる記述となっている。しかし、このような語句は、指導者の努力によって早くに消え、“望ましい”卒業生が誕生するに従って、「自由学園」が前面に押し出され、自由学園の流儀が全てに先行するようになる。指導者と卒業生はすでに「自由学園的状况」を作り上げているのであり、新入生はこの規範の満ちる世界に迎えられるのである。そういう意味では、指導者は「野蛮な貧しい暗い国」「薄暗い封建魔王の世界」にいる中国の人々に合理的な生活方法を教えようとして未開の地に赴いていったというより、むしろ、中国の中に存在する“自由学園”という世界に選ばれた少女達を迎え入れ、独自の教育を伝授したといった方が適切であるように思う。結果的には押しつけの善意であり、「中国人」を全面的に意識しての活動ではなかったという点では奥田の批判に反対ではないが、一步生活学校の門の中に入れば、そこはすでに自由学園の世界だったのであり、戦時下においては、その世界に入りたいと願っていた人々もまた多かったことは疑いえない⁵³⁾。羽仁はむしろ、そういう世界を作ってしまった歴史的状況をこそ反省すべきだったのではないだろうか。

また、指導者に課したひたむきな努力について、言及しておく必要があるだろう。この指導者に課した羽仁の期待の中には、東北セツルメントの活動の時と同様、個人のひたむきな努力が世の中を良くしていくのだという単純な信念が見られる。それ故、指導者達にも、ひたすら個人の心がけを求め、そこから派及してくる良い影響に期待するのである。羽仁は、その努力によって友の会や自由学園においてきちんとした訓練がなされれば、その力は農村にも、国外にもどこにでも通じるのだと考えていた節がある。羽仁は、善悪入り交じった鉾石の中から自らの中にある悪(罪)と闘い、悪から解き放たれてこそ本当の意味で自由な人間になっていくという自己改造、自己革新が教育だと考えていた⁵⁴⁾。頻出する「進歩」と言う言葉にはそれが強くにじんでいる。指導者の努力は相当なものであり、既述したように一面では大きな成果をもたらすこととなった。しかし、そこには精神主義の効用と限界に通じる問題が常に存在しているのを感じる。羽仁には何事も「没法子メー・フアン・ツツ(仕方がない)」と済ましていた中国の少女たちに良い生活法をもたらしたという自負があった。北京生活学校の実践が関係者にとって望ましい結果をもたらしてしまったからこそ、羽仁及び関係者は、戦後に至っても戦中の言動を反省することはなかったのである。

上記の全てが第三の問題点と関連してくるのだが、羽仁には、戦争そのものの問題や女性や子どもが戦争の犠牲になっていくことに対する言及が全く見られないという問題点が見られる。羽仁に

は個人が懸命に生きるならば、その結果は必ず良くなる、自己の勤勉さに神は必ず報いて下さるという単純な信念があった。戦争の結果にさえその姿勢が反映されるのだという無邪気な確信を持っていた。東北農村生活合理化運動（東北セツルメント）の成功により、羽仁と友の会は国家の主導する生活合理化運動に積極的に協力し、北京生活学校創設直後の1938年6月には、羽仁は大蔵省の国民貯蓄奨励委員に任命される。羽仁は「主婦生活指導隊」を組織し、工場労働者の主婦を対象に家事の急所、時間の使い方、家計予算の立て方等の講習会を展開する。この試みが好評を博し、多くの会社から依頼が増えていく。1940には全国49都市で講習会を開くほどになり、厚生省、商工省、大蔵省、農林省などが次々と友の会に協力を要請している。それまで、友の会員が私事として行ってきた生活合理化運動が国家に認められていったのである。この時点で、羽仁は自身の活動を“神の祝福、神の容認”と捉えてしまったのであった。羽仁は次第に、個々の家庭をよくすることが国家をよくすることであり、生活の合理化が国防なのだ、「家庭と国家」を直結するようになる。一面で羽仁は社会改良に関心を示すのであるが、貧困や差別など深刻な矛盾を持つ現実社会の革新までは考えず、上記のように個人や家庭、学校が良くなることによって、国家も進歩するという確信を単純に深めてしまうのである。北京生活学校は、国家に認められていく絶頂期の中で経営され、結果的に戦争肯定につながる活動となってしまった。

北京生活学校の教育は、卒業生の一人が知っているように「ほかの学校では勉強一番大切です。私達の学校では工芸、日本語でなく、世界中で一番むつき友達のみじわり、私達深く深く考え(原文ママ)」⁶⁰、自己の内面の悪と闘っていくものだったのであり、人間の一面の課題には答え得るものであった。それ故、戦争が終わって時間を経たときに、卒業生にはいい知れないなつかしさを呼び起こすものとなったのである。しかし、それは人間の一面の課題に答え得たに過ぎない。北京生活学校の教育は、既述のような教育効果を上げ、評価を得たからこそ、それに安心して、戦時下の行為を吟味し、反省する機会を逸してしまったのだといえよう。戦後に至っても、北京生活学校の置かれた“歴史的状況”を認識しえなかったことが最大の問題であった。

注

- 1) 教育活動の概要については槻木瑞生「大陸布教と教育活動—日中戦争下の日語学校 覚書」(同朋学会『同朋大学論叢』第64・65合併号、1991年所収)を参照のこと。
- 2) 同上、300ページ。
- 3) 満州国公布「学校教育ニ於ケル日本語普及徹底ニ関スル件」より。
- 4) 齊藤道子『羽仁もと子—生涯と思想』(ドメス出版、1988年)、290ページ。
- 5) その経緯を羽仁吉一は「馬伯援氏の紹介で、四川省の教育使節団の一行が学園に参観に来たことがあった。帝大をはじめ方々の学校で官僚式の冷たい取扱いに不満を持っていた一行は、学園の心からなる家族的待遇に感激して、演説をするやら校歌を歌うやら大満足で引き上げていった。その一行が帰ると報告書にそのことを書いたのがきっかけで、日本に来る教育使節団のスケジュールには自由学園見学が不可欠の項目になっていた。」と書いている。(羽仁吉一『雑司ヶ谷短信下(1953年7月)』、婦人之友社刊、1956年、187ページ。)
- 6) 山室光子は、「岐路の上海。・・・わたしの心にふと蘇ってきたのは遙か昔、少女の頃に見た情景だった。羽仁両先生を中心として北京大学、広東大学の五十人余りの男女学生を迎えた交歓の一時のこと。・・・当時の日本の子供にとってこれほど多数の中国の友と交わる機会是他

- になかったろう。」と自由学園を通して女学生時代に与えられた影響を記している。(『婦人之友』1991年10月号, 74ページ。)
- 7) 前掲『雑司ヶ谷短信下 (1953年7月)』, 188ページ。
 - 8) 『婦人之友』1938年2月号所収。当日の出席者は、安部磯雄, 久布白落実, 河野密, 小泉丹, 東畑精一, 長谷川如是閑, 松岡正男, 羽仁もと子, 羽仁吉一の9名である。
 - 9) 自由学園女子部卒業生会編『自由学園の歴史2-女子部の記録(1934年~58年)』(婦人之友社, 1991年), 92ページ。
 - 10) 自由学園では卒業年時生が, 一つのテーマを選び全員で学習・調査等を行うことを恒例としている。この卒業勉強から, 消費組合や工芸研究所が誕生し, 東北セツルメント, 家庭生活合理化展覧会, 美術工芸展覧会などの活動が行われた。
 - 11) 羽仁五郎『自伝的戦後史』(講談社, 1976年), 74ページ。しかし, 日中戦争が勃発すると, 友の会は早速軍用機資金として1000円を献納している。その資金源は北京生活学校を支えたと同じ友の会会員による「一日一銭醸金」であった。
 - 12) 清水安三「対支文化事業の半生」(『教育』第6巻第1号)による。また, 妻の清水郁子は座談会「北支を住みよい天地とするために」(『婦人之友』1938年5月号所収)に出席して, 支那語を勉強しようとしないうこと, 必要なものがなければ独創性を働かせて工夫してアジャストしようせず, 不平をいって帰ってしまうこと, 風紀がみだれていることなど日本人の態度を批判し, 改善を求めている。
 - 13) 『羽仁もと子著作集11巻』, 275ページ。
 - 14) 同上, 277ページ。
 - 15) 1935年, 羽仁は大凶作に見舞われた東北6県にセツルメントを開設, 5年余りにわたって貧しい家庭の主婦を対象に裁縫などの技術の指導を中心に生活を工夫させていくための生活合理化運動を展開した。東北セツルメント活動の詳細については, 拙著「賢母と模範家庭の社会史」((叢書〈産む・育てる・教える〉5巻『社会規範』所収, 藤原書店, 1995年)を参照のこと。
 - 16) 齊藤前掲書, 169ページ。説子は羽仁家での相談会には, 吉岡弥生, 平塚らいてう, 与謝野晶子, 大江スミ子, 市川房枝等の顔が見えたと記している。(羽仁説子『妻のこころ』, 岩波新書, 1979, 60~61ページ。)
 - 17) 北京座談会「北支を住みよい天地にするために」(1938年3月30日夜)が開かれている。出席者は安東吉光(外交官補), 伊藤愿(平生夙三郎秘書), 阪谷希一(中国連合準備銀行顧問), 清水郁子(北京崇貞学園), 萩原徹(領事兼大使館書記官), 松方三郎(同盟通信社北支総局総務部長), 毛里英於菟(大蔵省書記官), 湯沢三千男(北支派遣軍行政顧問), 安部道雄, 山室善子である。しかし, 同年4月22日には平生夙三郎と会い, 生活学校への賛同を得ている。一方では, 自由学園が北京で学校を始めるのなら貴族や富豪の子女のための学校を創ってもらいたいと熱心にすすめる人もあったが, 羽仁達は何の背景もない窮巷の中から教育の対象を選んだと書いている。(『雑司ヶ谷短信下(1953年7月)』, 189ページ参照。)
 - 18) 『婦人之友』, 1938年6月号, 41ページ。
 - 19) その後, 入学希望者が年々増え, 例えば1939年の第4回生選考の場合は願書を提出した者が定員20名に対して220人を越えた。指導者と助手は願書を持参する一人一人と話し, 観察した。8月27日には筆記試験が行われ, 翌日は技術(裁縫), 体操, 体格を見る一方, 羽仁と吉一は

朝から一人ずつ面談し、その中の有望な者40名を二組に分けて集団面談した。続いて、有望な者の家30軒を7組みに分かれた指導者と助手が二日かけて訪問し、面談・調査した。このような過程を経て21名を選んでいる。以降は、ほとんどこの形式で選考が行われた。選考に時間をかけるのは自由学園の方式である。1988年10月来日した李玉珍（生活学校8回生）は、「一時間目は算数と国語。二時間目は草取りで雑草とよい草をよく調べて取るのです。三時間目は覚えていません。四時間目は口頭試問で、その時、羽仁先生にお会いし、指導者の通訳でお話をしたのです。受けたのは240人位、そのうちの20人がパスしました。」と語っている。（『婦人之友』1989年1月号、83ページ。）1943年9月には、400余名の応募者の中から、25人が選ばれている。北京では生活学校は有名な学校となっていたのである。

- 20) しかし、この門番制は1940年夏に廃止された。北京生活学校の生徒によって発行されていた「生活報」には「生活学校はいよいよ門番なしの家になった。自治自営を理想とする生活学校にとっては、不似合な存在であった二人の門番が帰ってから、助手研究生は自治の領分が広がったことを喜んで、毎日のいろいろな事務に一層の責任をもってあたっている。（後略）」と記されている。（『婦人之友』1940年8月号所収、113ページ。）
- 21) 軍部は北京生活学校の背後にある「キリスト教主義」が心配だったようである。1939年3月26日には責任者の山室光子が高松宮に賜謁し、生活学校が「一つの宗教によらなければならない」というようなことを思っていないか」という質問を受けている。（『婦人之友』1939年5月号参照のこと）
- 22) 通訳は阪谷希一の長女の朗子、北京大学教授銭稻孫の息子の妻（氏名不詳、記事には銭さんとはだけ出てくる）などが協力した。
- 23) 『婦人之友』1938年6月号、43ページ。
- 24) 『婦人之友』1939年6月号、149ページ。
- 25) 『婦人之友』1939年9月号、34ページ。
- 26) 『婦人之友』1938年7月号、47～48ページ。
- 27) 『婦人之友』1938年11月号、69ページ。
- 28) 同上。
- 29) 『婦人之友』1939年1月号、113～114ページ。
- 30) 羽仁恵子「北京の春」（『婦人之友』1940年5月号所収）、204ページ。
- 31) 『婦人之友』1942年6月号、93ページ。
- 32) 『婦人之友』1938年10月号、38～39ページ。
- 33) 『婦人之友』1942年4月号、22ページ。
- 34) 詳細は駒込武「戦前期中国大陸における日本語教育」（『講座日本語と日本語教育第15巻日本語教育の歴史』所収、明治書院、1991年）を参照のこと。
- 35) 『婦人之友』1943年7月号、32ページ。
- 36) 北京生活学校が開校していた約8年の間に、羽仁夫妻は8回北京を訪れている。吉一は「旅行などとかく気の重い自分が、年に二度、少なくとも一度は七十幾時間もかかる大陸の汽車に乗って北京に行ったこと8度に及んだのを見ても、自分たちがいかにこの事業に全身全力を傾け尽くしていたかが分かるであろう」と記している。（『雑司ヶ谷短信下（1953年7月）』、192ページ。）

- 37) 『婦人之友』1938年9月号, 109ページ。
- 38) その他, 自由学園の美術関係の教師, その他の教科の教師, 自由学園父母会員, 北京, 大連, 天津の各友の会会員, 男子部卒業生等が指導・協力している。
- 39) 『婦人之友』1940年6月号, 90ページ。
- 40) 羽仁吉一前掲『雑司ヶ谷短信上1943年10月』, 259ページ。
- 41) 「北京からの二少年」(『婦人之友』1943年4月号, 64~65ページ。)
- 42) 山室光子は「北京今日明日」という一文の中で「この頃生活学校を訪れる参観者に目立って中国人が増えてきた。毎年新卒業生の見学プログラムに生活学校見学を必ず加えるようになった学校も少なくない。先日通州女子師範の78名の一隊を迎えた。」(『婦人之友』1941年7月号所収, 160ページ。)と書いている。また、「この春北京に行った時, ある日輔仁大学教育学系の卒業前の男女学生50名あまりが生活学校を参観に来た。」(『雑司ヶ谷短信上(1943年1月)』, 242ページ)という記事も見られる。
- 43) 『婦人之友』1941年1月号, 88ページ。
- 44) 羽仁吉一は「浄財のみによって賄われ, 政府や軍からはビター文の補助金も受けなかった」(『雑司ヶ谷短信下(1953年7月)』, 192ページ)と書いているが, 1944年になって日本大使館が主任の山室光子を「中国子女の育英, 善隣精神の具現に功績大なり」として表彰し, 国民政府が10万元(儲備券)寄贈し, 45年には北京市から5万円寄贈されている。
- 45) 羽仁吉一前掲『雑司ヶ谷短信1953年7月』, 191ページ。後でこの住民の様子を聞いた指導者達は長年の労苦が報いられたような気がして感涙を落としたという。
- 46) 輔仁大学は, 元来アメリカのカトリック系ベネディクトス会の出資により創設運営された大学である。1933年, 経済不況から同会による資金援助が困難となり, ローマ法王庁の調整でアメリカ, ドイツ両国の神言会による共同運営に変わった。従って運営主体からみれば, その半分は日本にとって「適性」機関であった。同大学では, 1941年に日米の軍事衝突が必至になると, アメリカ国籍の教職員は続々と引き上げ, 代わってドイツ国籍の教職員を補うことで存続していたのであった。詳細は, 大塚豊「戦時下中国における欧米系大学」(阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦』所収, 第一書房, 1983年)を参照のこと。
- 47) しかし, かつての生活学校の形態は長くは続かなかった。戦後の摂取, 指導者の帰国の後, 閉校に至るまで最後の仕事を全うした助手の一人は「生活学校の形は少しも残りません。今までの苦心はどこにあるのか, ほんとに残念です。悲しいけれど, これからの生活学校は私たちの家——一人一人めいめいの家が即ち生活教育の場所と思います。」という手紙を羽仁夫妻に送った。二人はこれを繰り返し, うなづきつつ読んでいたという。(『婦人之友』1991年10月号, 71ページ。)羽仁夫妻は, この時何を考えていたのであろうか。これに関連する記事はない。
- 48) 羽仁吉一前掲『雑司ヶ谷短信上(1945年8月, 9月)』, 293ページ, 『雑司ヶ谷短信下(1948年7月および1950年7月)』, 52ページおよび100ページに卒業生から便りがあったことが, その内容とともに書かれている。
- 49) 『婦人之友』1991年10月号, 72ページ。
- 50) その一人, 李玉珍は「あの頃先生方はまだ二十代だったでしょう。あとで私が教師の道を選んだのは, 日本の若い先生が, 自分たちのためだけでなく中国のために力を出して下さったことを覚えていたからです。あんな一生懸命な先生はどこを探してもありません。」と述べている。

(『婦人之友』1989年1月号), 83ページ。

- 51) 例えば、武田清子が『婦人解放の道標』(ドメス出版, 1985年)の中で、奥田暁子が「キリスト者の戦争責任—羽仁もと子の思想と行動」(奥田暁子編著『女性と宗教の近代史』所収, 三一書房, 1995年)の中で羽仁の戦時中の行動を批判している。批判の内容は本文で指摘したとおりである。天皇に対して羽仁吉一は「我々は日本の国柄を信じ、皇室を尊敬することにおいて、決して人後に落ちる者ではない。しかし天皇を‘神’とすることは、我々の信仰の絶対に許容し得ざるところである。この一点は我々の心を痛めたところであって、この信念を貫くためには、或いは死も免れ得ないのではないかと密かに思い定めたこともあった。一度敗戦となるや、人心は極度に混乱し、新聞を見てもラジオを聞いても、皇室に対して、普通人に対してさえ用いないような無礼きわまる言辞を弄して恥じないような世にも苦々しい時は暫く続いた。学園では朝礼の前に国家を歌うことを、戦前も戦時中も戦後も、一日も休むことなく今日に及んでいる。世間がどう変わろうとも、我々の信念は永久に不動である。」と述べている。(『雑司ヶ谷短信下1953年11月』, 204ページ。)羽仁もと子も同様に考え、同様の対応をしている。
- 52) 奥田前掲論文, 18ページ。しかし、当然のことであるが、山室光子は、「張懐先生と劉秘書は案内格のように説明にあたられ生活学校の教育は侵略ではなかったと言われたという。」と書いている。(『婦人之友』1946年7, 8月号合併号, 59ページ。)
- 53) 『婦人之友』誌上には、入学を希望する少女や家族の例が多数見られる。北京生活学校の受験者数の増加もその希望の現れといえるのではないだろうか。
- 54) この考え方は、反面、福音主義的キリスト教が示す人間の罪の問題を、羽仁が自身の教育観、自由観の中で健全に捉えていたと見ることもできる。しかし、羽仁のこの思想は、自由学園関係者、ことに友の会会員には充分理解されたとはいえず、現在においてはなお、表面的な把握に終わっているように感ずる。
- 55) 『婦人之友』1939年9月号, 32ページ。